

『ロシア革命史』

全5冊

レフ・トロツキー著／藤井一行訳

上島 武

アイザック・ドイッチャーは『追放された予言者・トロツキー』の中で、特に「歴史家としての革命家」の一章を『わが生涯』と『ロシア革命史』のために割き、後者は“そのスケールと力において、そしてまた革命に関するかれの思想の最も完全な表現として、かれの最高の著述である”と評した。そして本書は“十月革命後50年たつ今日、いまなお唯一の完全なロシア革命史である”とも書いた。実はこの批評自体、中にやや問題とすべき箇所もないではないが、全体として本書に対する今なお最良の批評となっている。私ごときの何か付け加えるべきところとてあるはずもないが、ロシア革命後85年、それどころかソ連崩壊後11年の今、藤井一行氏による新しい日本語訳の現れた機会に一言、思うところを述べておきたい。まず、本書が最高のロシア革命史である所以をここで説き尽くすことはとうていできないが、最低限、次の諸点を述べる必要がある。

第一に、それはロシア革命がなぜ起こらなければならなかったか、起こったとき、なぜあのような経過をたどったのかを分析し、それはいわば起こるべくして起こった革命であること、つまりその歴史的必然性を明らかにしている。これは、世紀の転換点に立ったロシアの全面的分析なしには不可能であるが、彼はマルクス主義的歴史観をさらに発展させ、後進国ロシアではブルジョア的発展さえプロレタリア革命によってしか保障されない、だがプロレタリア革命が勝利を保障されるには国際的革命が不可欠で

あるとの、いわゆる永続革命論を確立することによってこれを為しとげることができた。

第二に、革命の本質が膨大な民衆の願いを民衆みずからの力で実現する過程とした上で、この願いを実現するためには、上記歴史的必然性を洞察し、民衆運動の発展段階を規定する法則性をも理解し、それらに照応する戦術を常に提起しうる革命党が存在しなければならないことを明示している。民衆の運動、その機関（この場合はソヴィエト）なしに革命は起こりえないが、その勝利を確実にするには指導組織としての党を欠かすことはできないという、それぞれの役割と双方の関係についての正しい認識を示している。これも彼が若いころから培った組織論によるところが大きい。

だから、本書は最高の歴史書であると同時に、最高の歴史理論書（同時に政治学のそれ）でもある。刻々と生起する諸事件は、むしろそこに思いがけない偶然や紆余曲折を伴いつつも、あるいはそれらさえもが、客観的諸法則の特殊な現象形態として現れる、あるいはかかるものとして読む者に意識させる。時に本書が過度に「演劇性」を露呈していると批判されるのもそのためであるが、上記に照らして妥当性を欠く。歴史はみずからの法則の存在を意識させるためにロシア革命という舞台と登場人物を用意したのであって、決してその逆、すなわち、革命の当事者たちがみずからの行動を正当化すべく歴史の法則を弁じ立てたわけではないからである。

今更なぜこのようなことを言うかといえば、ソ連崩壊後の今日、まさにこれらと正反対のことが、それもかつてロシア革命を肯定的に評価してきた人々によって公然と語られているからである。曰く、ロシア革命はあるべき歴史の発展を中断または逸脱させた、豊かな「民主主義的」、「市場経済的」発展の道は閉ざされ、抑圧と窮乏の数十年がこれにとって代わった。また曰く、革命に参画した民衆の数はきわめて少なかった、革命を指導したと称するボリシェヴィキは権力欲に飢えた一握りの冒険主義者に過ぎなかった、彼らはたまたま大戦がもたらした権力の空白を利用し、これを篡奪したに過ぎない、

さればこそ革命は孤立し、社会統治能力に欠けた権力集団は一貫してみずからの利益確保だけに狂奔したのである、云々。

かつて本書は「人民の敵」によってものされた異端の書であり、ソ連本国において読むことを禁じられた。国際共産主義運動もそれを踏襲したから、ロシア革命の現実的態様と歴史的意義を理解すべく本書をひもとく者は、おおむねその外部に限定された。それどころか本書を高く評価した人には、革命にも社会主義にも関心の薄い人々が多かった。事態の息詰まるような劇的展開と、それを活写する華麗な筆致に魅惑されて、本書を歴史書ならぬ文学書とする向きも少なくなかった。そしてソ連崩壊後の今日、トロツキーへの関心はもちろんのこと、ロシア革命に対する関心もまた著しく低下している。ロシア革命は所詮20世紀の一挿話に過ぎなかったとの見解さえある。しかしながら一考すべきは、今日ロシア革命に向けられている大方の批判と清算の評価は、革命がその後経験した墮落・変質の諸結果によるものであって、墮落・変質ともっとも精力的に闘ったのがトロツキーであったこと、そして、これが是正されぬ限り、革命の挫折もソ連の崩壊も避けられないとしたのは、ひとりトロツキーのみであったということである。

だから、本書は今こそ読まれ、読み継がれていくべきである。そして今、われわれは望みうる最高の新しい日本語訳を手にすることができた。特筆すべきは訳者・藤井一行氏によって行われているテキスト類の比較対照と、その入念きわまる吟味である。詳しくは訳書末尾の「底本をめぐって」を見ていただくほかないが、従来の山西訳がマックス・イーストマン訳の英語版を底本にしていたのに対し、新訳は各種ロシア語版に始まり、トロツキー自身による修正原稿までを参照している。それによって藤井氏は、今回みずからロシア語テキストの決定版を事実上作成したと述べているが、単なる豪語では決していないことが諒解されるであろう。

一方、山西氏は古くからトロツキー、ドイッチャーの翻訳に携わり、訳文の流麗さには定評があった。底本の欠陥や先駆的事业に避けられ

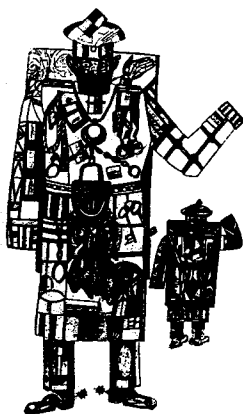
ない瑕瑾を別にしても、新訳がその一点で遜色を示すのではないかと懸念がありうる。しかし、それも杞憂だった。新訳は充分に著者と原著書の放つ香気を伝えている。正確を期した訳語・訳文が時に直訳調を感じさせるかもしれないが、上記の通り、本書は文学書ならぬ歴史書として読まれるべきであるからには、むしろこの方が望ましい。ただ、山西訳で既に一般化している特定の訳語と異なる新訳語、あるいは固有名詞の表記に違和感を持つ向きがあるかもしれない。例えば、永続革命論の核心をなす概念、「複合的發展」を新訳では「結合發展」としている。また、固有名詞のカタカナ表記では、特に定着しているものの他はロシア語発音に近い表記をとったというが、ケレンスキーがケーレンスキーなら、トロツキーもトロツキイではないかとの野次がありうる。しかし、それはそれで良い。「結合發展」も誤りとは言えない。

もう一つ、山西訳と異なり、新訳には付表、参考文献の他、豊富な訳注があり、その補正さえある。これらがいかに読者を益するかは言うまでもないが、同時にこれは、新訳が単なる翻訳作業を超えて、実に新たな「ロシア革命の研究」でもあることを示すものである。それは、訳者が特に書き下ろした解題「トロツキーとソヴェト議会主義」にも見ることができる。ここで藤井氏は蜂起戦術をめぐるレーニンとトロツキーの対立に焦点を当て、党による蜂起を訴え続けたレーニンに対し、あくまでソヴィエトによる蜂起という戦術を優先させたトロツキーが完全に正しかったこと、レーニンの思考の背景には根強い「代行主義」があつて、トロツキーはそれから免れていたことを強調する。ここにも文献的考証が加えられて説得力に富むし、私自身も基本的に同意することができる。とは言え、なお今後いつその検討に値する問題の一つではあろう。

ともあれ、新訳書は翻訳大国日本が生んだ翻訳文化を象徴する新たな金字塔である。訳者に深い敬意を表するとともに、広範な読者を得ることを期待してやまない。

(岩波文庫、2000・20001年 4,400円)

(かみじま たけし・大阪経済大学／社会主義経済論)



November 2002

Eurasian Studies

ユーラシア研究

●扉エッセイ●小さなエピソードと大きな物語——藤田 勇

特集Ⅰ

シンポジウム 今、ユーラシア主義とは？

ロシア思想史におけるユーラシア主義——渡辺 雅司…2

ユーラシア主義の系譜とプーチン——堀江 則雄…8

「2002年6月、中央アジアにて」——ルボと若干の考察——田中 哲二…14

“北東アジア”圏における地域経済協力の諸相——島崎 美代子、二瓶 剛男…22

特集Ⅱ

プーチンの外交

プーチン時代のロシア外交——対中国関係を手がかりに——岩下 明裕…28

プーチン以後のロシア外交——松井 弘明…34

第一段階のプーチン外交——横手 慎二…39

プーチン時代のロシア＝ウクライナ関係——末澤 恵美…45

●連載

日露のかけはし② 悲劇から始まった日露友好の絆——西口 亮…50

ネットワーク② 通訳の現場より——2002年サッカーワールドカップの巻——井ノ口 充代…52

若者の論壇② コーカサス・いろんな国のいろんな話——百瀬 智佳子…54

ユーラシアの秘境⑦ 奇跡の島 ヴァラアム——川上 玄…57

●旧ソ連諸国のうごき

“どうなる千島列島”——千島列島の生態・環境——都留 信也…60

国民国家の現実としてのベラルーシ その1（歴史的概観）

——L.N.モロース、I.L.ヴェルショーク（松井憲明訳）…63

●書評

→ レフ・トロツキー著／藤井一行訳『ロシア革命史』全5冊——上島 武…65

佐々木照央著『ラブローフのナロードニキ主義の歴史哲学——虚無を越えて——』

——長縄 光男…67

●図書紹介

瀬尾英吉著『シニア十年のロシアウオッチング』——この尽きせぬ愉しみ——

——高島 雅映…70

ペータ・ゴシュトニー著／守屋純訳『スターリンの外人部隊』——杉山 秀子…71

溝端佐登史・吉井昌彦編『市場経済移行論』——佐藤 和子…72

●topics

《メリホボの春—2001》その2——中本 信幸…73

●アピール アラル海保全に向けてご協力を訴えます——M. A. サルセムバエフ…75

●東郷正延先生を偲ぶ——箕浦達二／マルガリータ富田／実藤正義…78

●編集後記

